通俗日本小史

渡邊義方編輯

第八編

下

A557
16

# 通俗日本小史八編の下

東京　渡邊文京操觚　淡崎延房撿閲

再び説く賊軍京師に乱入してより天下亦一の高時と生ず其慘毒皇家に及び乗輿叡山に行幸まして義貞以下の諸將とともとして官軍僅に三万餘騎を率ひて擁護して叡山に拠る賊將細川定禪園城寺に軍して以て叡山を窺ふ両軍相持して未だ戰はず會々陸奥守源顕家召に應じて兵を率ひて官軍



48-8447

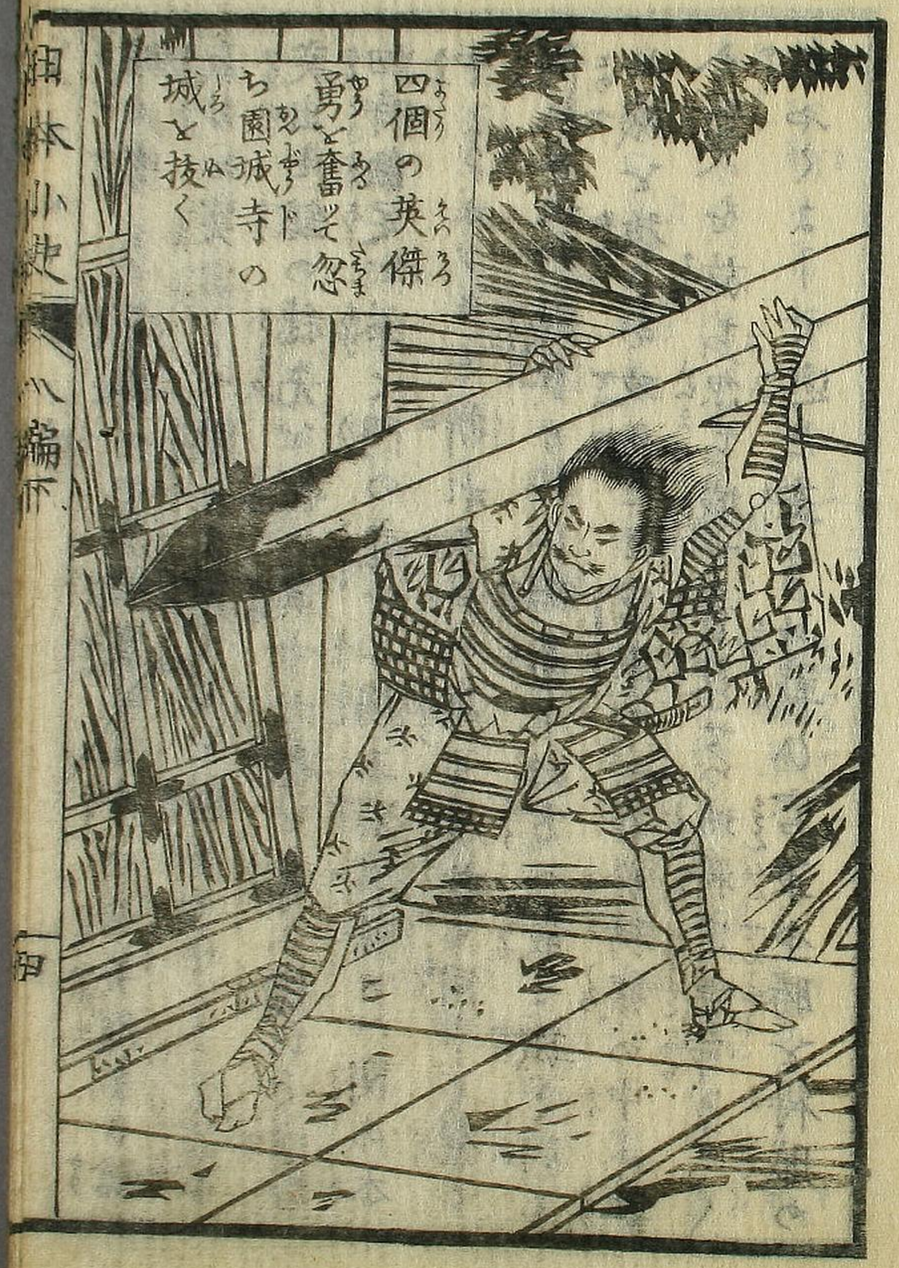
と援く尋で越後上野常陸下野等より残りなる新田氏の一族郎黨京師の危急を傳へ聞き此彼より馳加たるる程より官軍復大ひより振ひ其勢程なく五万餘騎よりなりより東國の官軍既より行在より着れば顯家卿義貞朝臣その外宗徒の人々相會して軍事を議し遠きを馳て来りし人馬倶より疲をれを一両日人馬の足を休ら而して後戰ふらそ得策なるらんと顯家卿の発議したまひしなる紙大舘氏明進こ出で長途ふ疲をし我馬を一日さりとも休めなべ中々より血下りさ

まちさく馬足重くなりて四五日ハ物の用より立べらぞ兵法より曰ぞや兵ハ神速を貴ぶと如ぞ今夜不意より起りて園城寺を襲なんまハ勝を得んと疑ひなしと勇気凛然四方をならひ詞と放つ剛気の建策義貞屢々點頭きて頃て其議より従ひつ即夜兵を唐崎より出し明る紙待て諸將を部署し六万騎を一手より合し急より起つて園城寺を囲む賊も期しなるをみまべ南院の坂口まで繰出し射戰より時を移せしより勇を立さる官軍の勢ひ頗る猖獗なるようさしもの賊軍當りる

且戦ひ且卻ぞき迅くも城に逃入りて城戸を鎖し橋を引き堅く守りて出ざるあぞ大将義助是を見て奮然として指揮するやうなる言甲斐なき挙動うる僅の木戸に支へられ箇計の小城を責落さぞと云事やなる進めくと励まし立る勇将の下に弱卒なし現に見出る勇猛武者去者なりと聞えし栗生頭友篠塚伊賀疾や案内仕らんと言際馬より下立て城戸の傍まで走り寄り彼方を屹と見渡せば屏の前に深さ二丈餘りの濠を堀りて左右の断岸に屏風を立うる



如くなるに橋の板をば皆刎外して橋桁のみぞ立たり是に至りて両雄い如何して渡るべきと見顧る傍の塚の上に周囲三尺に長さ五六丈も有らんと思ハる大率都婆二本なり是屈竟と両雄い同じく小脇に挟さみ曳と一声引抜けば傍の土一二尺ゞ程ころころと崩れて率都婆い難なく抜よろ頓ての事よその卒都婆を軽々しく擡げ来て向ひの岸へ倒し掛け忽ち橋とぞ掛りける是より畑亘の両雄斜なる橋を駈渡り堀の上なる逆茂木を取て引除各々


四個の英傑
勇を奮ひて忽
ち園城寺の
城を拔く

城戸際まで逼寄せ賊軍は三方の土矢間より鎗
長刀を突出して散々に突くると物々しやと亘忠景
突出す鎗の穂先を捉へ其十六槍を奪ふ續いて進む
畑時能足を挙て門の扉を二路三路蹴返せば関の木
中より ホツキと折れ木戸の扉も屏柱も同じく堂と
倒れ崩れば賊兵それに碎易し四方へ散て颯と引く
此機を抜さず攻入れと官軍の三方餘騎城の中に駈
入て火を放ち忽ち城を責落せば城将定禅命からく
漸やくにして逃れ奔る此戦ひ官軍全勝を得賊の



首を斬ること七千余級以て其激戦なるを知るべし戦
争既に利を獲しかば顕家退ぞいて坂本に陣を義貞
もまた兵を收めんと欲す舟田経政馬を叩いて義貞
を諫めて曰く兵の利は勝に乗るに在り一敗魂飛び
気沮む今勝に乗じて連に進まば遂に全勝を得べ
し時機を得ずして失ひ易し賊兵を鏖殺せんにと
今を捨てまた何時をか期まんとりくに義貞有理
と點頭き即ち三万騎を率ゐて追撃みをと尤も
急なり賊軍大ひに狼狽なし追手の多少を謀らう

絲只徒らに問着して擊ち者數を知らぎ鮮血は流
して杵を漂たせ伏尸を積で累々として擊洩されさる
賊兵を僅に逃して京師に帰り尊氏が軍に合を義
貞北ろと追ひ進んで華頂山の巔上に陣し敵の陣
を瞰下し王へた賊軍京師に充塞し上は河合の森よ
り下へ七條河原まで馬の三頭に手綱をうち掛鎧の
袖に袖と重ね東西南北四十餘町が間錐を立べき地
もなくまた身を時ざて打囲をたる形況凄ましくも又
勇ましく其幾千万るを知らぎ義貞謂らく敵を





味方に比ぶる時は大海の一滴九牛が一毛も啻な
ぎ寡と以て衆に當る奇計を用ゆるに非ざるより
は勝を卜すること難しと即ち我兵の内より互ひに顔
を識り知らぎる者二千餘騎を撰り出し五千騎宛
一手とし各々一様に中黒の旗を携て紋を隠し笠
号を取て袖の下に收め園城寺の戰ひより引後れさ
る敗卒の真似して賊軍の中に混じ入り戰ひ始るを
待て起らしむ賊軍爭ふ恁る奇謀なりと知り得べき
已にして両軍接戰六十餘合或ひは離じ或ひは合ひ

追つ追ひつ入乱れ火花を散して奮撃突戦敵も味方も劣らず優ぎ叫き喚んで攻戦ふ賊ハ目ふ餘る八十万騎官軍僅々二萬ふ満ぎ漢楚八箇年の戦ひと一時ふ寄しも斯やと計り思はれる官軍ハ小勢なれども将士心を一ふして進退去就法ふ適ひ軍機精妙き義貞が采配更ふ間断なくよく兵を用ゆるもの多く賊い四倍の大軍なれども人心些しも一致せぎ思ひくふ戦ひる故寄手の官軍度毎ふ勝ふ乗ぎとつふて勢ー恁る処ふ賊中ふ紛れふ入たる一揆の官軍時機いよ



ーと尊氏の前後左右ふ起り立ち中黒の旗を飜へー中黒の新田の旗なり鯨声を作り前欲と見ぎ後ふ在り左ふ在るとぎれを右ふ現れ乱れ合てぞ戦ひる敵ふ味方ふ白真弓賊軍遽ふ騒ぎ立ち同士討るーて死る者数をしらぎ遂ふ敗ぎて潰へ走る官軍弥々勝ふ乗り短兵急ふ拉ーぐ日もすでふ既ふ暮れば義貞桂河より兵を收め一挙ふ京師を恢復ー凱歌を奏ーて京師ふ入り四條河原ふ陣を官軍四方ふ散ドて鹵掠を事とー止まりて本陣ふ在る者ハ終日の戦ひ

は疲れて物の用は立べくもなからむと斯と察せし賊の一
将彼細川定禅は先日の失敗を償はんと三百餘騎を
三手に分ち其夜不意に起りて京師に攻入り官軍の
本営を返り襲ふ思ひ設けぬ事なれば義貞義助一戦
に利を失ひ坂本を指て引返したり此戦争に舟田義
昌大館宗明等撃れたるに義貞は僅に二万騎の勢を
以て尊氏の八十万騎を駆散し定禅は亦三百騎を
以て官軍の二万餘騎を追落さる彼の項王が勇を心と
し是は張良が謀を宗として智謀勇力優り劣ら



ぬ人傑なり恁る処に官軍の別隊山道より利を失ひ
ひし者皆退ぞへて京師に入る官軍ますます多勢なる
りたれば疾や戦端を開らんとて翌日とべ正月廿七日
楠正成源顕家道を分つて進む其勢合せて十万餘騎
神楽が岡の辺にて賊軍と行遇ひ互に呼吸を推量り
稍兵端を開きたり智勇兼備の良将正成は一枚楯の
軽きを五六百帖たがせて板の端に懸金を壺とを打
て敵の駆んとする時は懸金を掛て繋ぎ合せ城の搖
楯の如く一二町が程に付併べて透間なく散々に射

義貞華頂山の巓上より陣ーを尊氏が陣を眺視る

立て敵引べ楯を畳み逞兵五百餘騎を発して追撃し、む其楯の屈伸自在にして忽ち繋ぎ忽ち離るゝ宛ぐゝ手足を役ふが如く今より始めぬ楯ぐ奇兵の鋒先より當りゝ賊軍一時に崩れ五條河原へと敗走を顕家ぐ二万餘騎も栗田口より押寄つ車大路より火を放てば尊氏親ら兵を指揮し四條河原に討て出で顕家と鋒尖を交へ追つ追たれつ戦ひしが雌雄未だ決せざ両軍互に戦ひ疲れ相引にるゝんとせし処へ義貞義助を始めとして堀口貞満大館氏明三万餘騎を三手に分ち中黒の旗五十余流比叡嵐に飜ぐへし法勝寺の前より討て出で雲霞の如く打囲をたる賊軍の中央を横様に駈通りて敵の後を立切んと京中へこそ駈入られ賊軍見るよりも素破例の中黒よと云程こそなれ馬を馳倒し弓矢とかなぐり捨て四方へぐと逃散る秋の木の葉を山下風の吹立るに異ならぬ義貞は是非とも尊氏を撃取んと鎧を脱換え馬をも乗換え只一騎賊の中へ駈入りく尊氏を索むれども獲ぎ遺憾遺方なきのゝ兵を

分ちて逃るを追ひ日既に暮れば皆京中へ引返し
り義貞留まつて京師に陣せんと欲せ正成こゝと
諫めて曰く今日我軍勝と雖も未だ賊魁尊氏を獲ず
寡兵を以て京中に屯せ其危きこと知るべし盍ぞ前日の
失敗に懲ざる我退けば敵再び京師に入らん如ぞ賊
を放つて京師に入しめて我鋭気を養ひ再挙して
敵を数百里の外に駆尽さんに是全勝の策なり
と義貞その議を然りとし乃ち退いて坂本に陣を尊
氏京中に敵なしと聞き諸軍を收めて復京師に入

る正成が士卒に門桜平次とかんしつる者あり善泣
人をして感動せしむるに妙を得たり人絆号して泣男
とゝ其智朝正成平次に謀計を教えて僧数人と俱に
京師に遣り彼処此処の戦場に泣々尸骸とを求めさ
せる賊軍怪みて事の由を問へば平次い得意の
涙を浮べ徐然として語るやう今い何をか包むべき昨日
の合戦に新田殿を始めとして楠北畠自余の七将皆戦
死し玉ひぬ我等余りの悲歎に堪ぎ責ていに亡跡を弔らん
と斯い尸骸を物色ありと誠しやかに打語る詞も涙に

口籠て誰ろ一人疑ふべき尊氏聞て大ゐ喜び彼戦ひ勝
ゐ退き去りし故なるべしと思ゐ違ひ戦死の一
報去るみても彼等が首ハ何くゐある索ね求めて梟
木ゐ懸よと敵味方の戸骸の中を漁りそれども
ぞと思しき頭もなろろ余りゐ多ゐ此ゐ
面影の似さりる首二ッを梟木ゐ懸て新田義貞楠正
成と書付を下て衆ゐ示を即夜正成士卒をして焼松二
三十本を燃し連ねさせて小原鞍馬の方へ落し其
灯影累々として絶ず賊軍是を望見て偖ハ官軍大将を討と

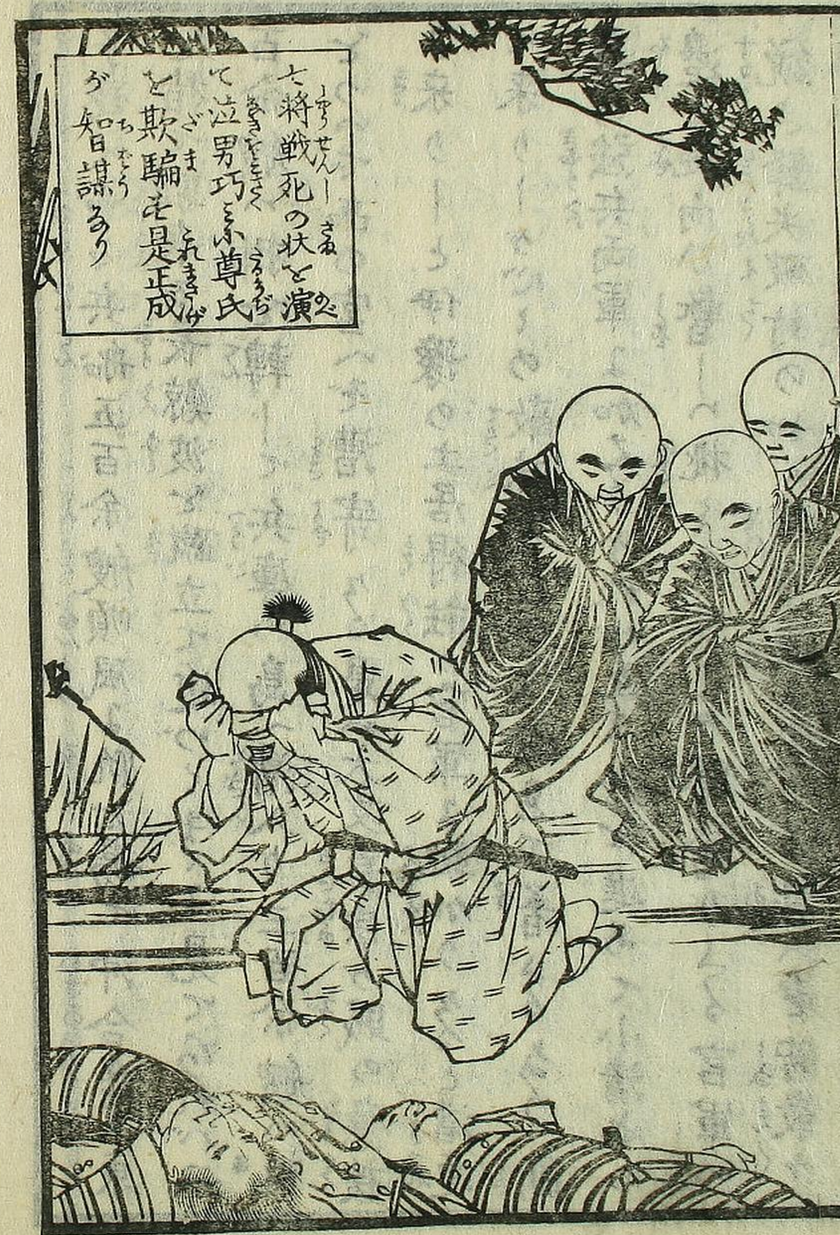


て落行とそ覚えそれ途ゐ遮り撃んとて鞍馬路へ三千餘騎
小原口へ五千餘騎勢多へ一万餘騎宇治へ三千餘騎嵯
峨仁和寺の方まで洩さぬ様ゐ堅めゐとて千騎二千
騎差分て各々敵ゐ向ハしめ果ハ京師の本営ハ空虚と
なり残りし豫備の番兵も用心をるハなろる去程ゐ
正成ハ間者を出して此様子を疾と窺ひ知るるのち
ら早我謀畧成就せりと義貞等と倶ゐ全軍鼓譟して
進撃ま思ひ設けぬ事なれば賊軍ゐ周章狼狽き或
ハハ丹波路と指て引ものろ山崎を志して逃るもなろ

官軍は左右に遠く追ざりるを前者後者を顧みて追兵と心得自殺せし者数を知らず大に潰へて逃走る尊氏直義為す処を失ひ彷徨湊川に走る官軍追撃甚だ急なり直義則ち敗兵十六万を部署し官軍の先鋒義貞義助が十万餘騎と豊島河原に戦ふ勝敗未だ決せず其日に戦ひ暮しぬ爰に又正成に合戦の体を見て正面より向いぎ道を神崎に取て濱の南より寄せる賊軍に終日の戦ひに軍馬甚だ疲れる上敵に後を包まれんとして一支も支え得ず兵庫をさして



引退く會々兵船五百余艘順風に帆を揚て沖合遥に東と指て馳来る長鯨波を蹴立て近づくまくに見てなれば二百余艘に楫を轉じて兵庫の島へ漕入り三百余艘に帆とつゝで西の宮へぞ漕寄る是に大友貞宗が賊の應援に来りしと伊豫の土居得能が官軍に馳加りると漕連て来りしが心々の敵味方左右に分れて着るまり新募の強兵両軍に加るれば互に兵を進めて小清水の邊に馳向ひ暫しに挑み争ひしが勝誇りする官軍の鋭き鋒尖破竹の如く賊軍遂に支やる能はず皆散々


大将戦死の状を演じて泣男巧みに尊氏を欺騙せ是正成が智謀なり

に撃るされ尊氏直義進退谷まり大友が勧むるまゝに
彼の兵船に打乗る諸軍勢これを見て素破大将あを
舟に召さて落させ玉へぞと乗後るゝと歩きあひ我
勝に乗んとて忙て騒げと如何せん舟へ僅に二百余
艘人へ二十萬騎に余まり一艘に二千人計り乗込る
故大船一艘乗沈めて一人も残らず海底の藻屑とゝり
て失はゝ自餘の舟之と見て左のゝへ人を乗せドと
急ぎ纜を解故てゝ乗後れる人々物具衣裳を脱捨
て遥の澳に游ぎ出て頃て船舷に取著んとまれゝ太刀



長刀にて切殺し艪舵にて打落され乗得ぎりく渚に帰
る者へ馳行く船どうち詠め只徒らに自害して磯超る波
に漂へり尊氏へ福原の京をさへ追落されて長汀の月に
心を傷ましめ曲浦の波に袖を濡して心筑紫に漂泊を敗
将の心ぞ如何あらん義貞へ百戦の功を全ふし順逆漸
やく処を得て逆徒都を落しぬべ主上山門より還幸な
りて花山院を皇居に成まるに朝廷義貞以下の戦
功を賞せらるゝ義貞を左近衛中将に義助を右衛門佐
に任ぜらる近日朝廷已に逆臣の為に傾けらるゝと

せーうども程なく静謐に属して一天下きと太平に帰
せーうべ此君の聖徳天地に叶へり復何の患へらなんえ
と群臣らつーの危き紙忘を偷安苟且に流して賊を
殲せを思をざりける人の心ぞ愚なる大凶一元に帰ー
て萬機の政事を新にせーうまーうべ愁を蓄む者なれば
喜びを懐く人も多うりける就中賀茂の社の神職ハ
神職中の重役にて熟陟補任素より例規の在るなり
て外なくーて改動の沙汰などあるべき事なるを曩日尊
氏京師に入ー時當時の神職貞久を黜けて基久なる

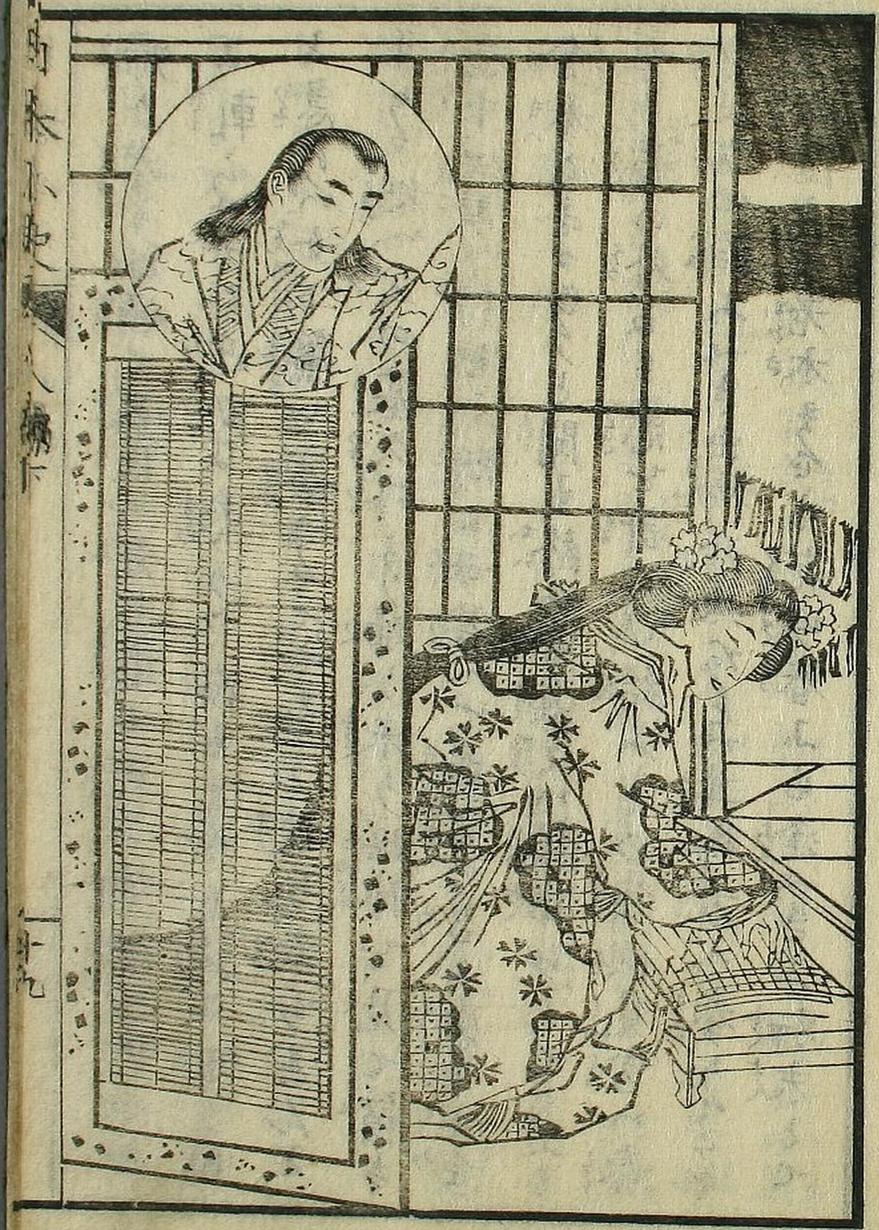


者に補任せらる彼基氏眉を開くこと僅に二旬を出ぎ
天下きと反覆せーうべ朝廷の御沙汰として旧の如く
貞久に任ぜらる抑々此事なる今度の改動つをるまを
両院（決定院 後宇多院）の御治世變轉まる毎に改動さるる事
掌を反すが如ーその逆鱗何事の起源ぞと尋ねきば
此基久に一人の女兒あり養をれて深窓に在りー時
より若紫の白珠に馥ーく初元結の寝乱髪未如何な
らんと見るに心も迷ひぬ齢已に二八ぬをもなり
ーうべ巫山の神女が雲とまりー夢の面影を留め玉

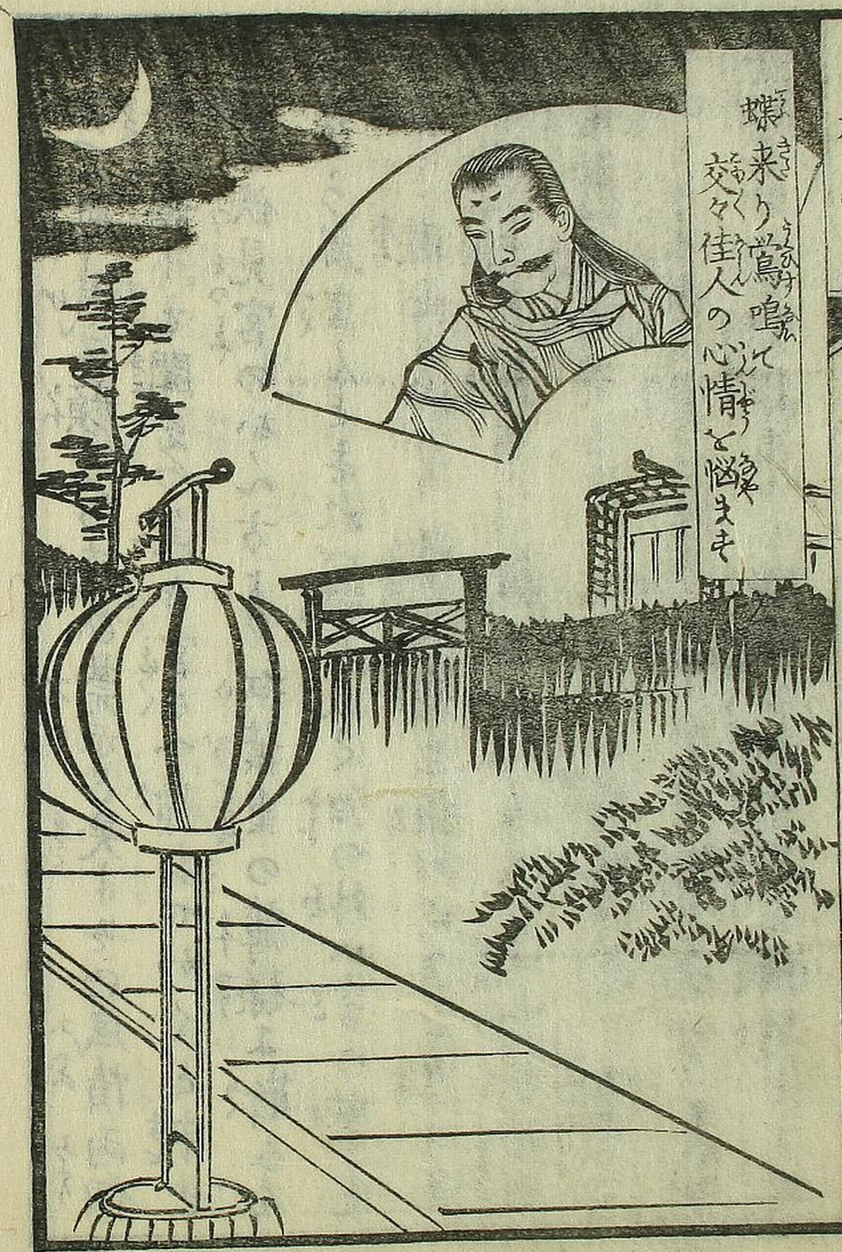
妃の太真院を出し春の媚を残せり帝は容色嬋娟の世に勝れるのみならず小野小町が弄びし道を学び優婆塞の宮の吟を給ひし跡を追しるべ月の前に琵琶を弾じて傾く影を招ぎ花の下に歌を詠じてを移らく色を悲しめり去べ其情を聞き其貌を見る人毎に意を悩ましめといふ事なし其頃後醍醐帝いまだ師宮にして幽らるる御棲居なり又今の法皇（光厳院）その後醍醐帝の忍び給ふ伏見院の第一の皇子にまして既に東宮にも立せ給ふべしと云雛し時めた合り此宮々如何なる玉簾の隙より垣間見られたん此女児のと美麗に臈蘭しそ思し召されたる去ども混淆るるか業に如何と思ひ煩ひも玉ひ萩の葉に傳ふ風の便りつけ萱草の末葉結ぶ露の即言に寄てい言ちぬ御文の数千束に餘る程に成ぬ女も最物こびしう哀に成る方に覚えれども吹も定めぬ浦風靡き果べき烟の末も終に浮名に立ぬべしと心強き気色をのみ関守にみて早三年を過ぬ父も賤しくれども母は藤原なれば女児に向ひ説るやうやんごとなき御子達の御

覚え等閑なりぬをなどや今までお應をも申さで
い止まるぞと最酷う打詫れば御消息齎せる
両宮の媒人次手よしと膝摺寄せ多羅乳母の諫めも
道理よして早く何方なと決し玉へ色よた返事をこ
そ願へしそれと左右より説勧むる唯ち顔なる二個
の使女兒い始終さ俯むた詞もなくで居るしぶ云計
りなく打詫て争や我とても斯なら両宮よ思れ
て何ぞと何れと思ひ分くべき只此上へ此度のお文
よ添らく御歌の憐ぞよ思れ侍る方へとそ参らあ

と云て耻し気よ顔うち掩ひ莞爾と笑しその風情両個
の媒人嬉しと聞えつ急き宮々へ帰りてかくと申せ
ば頓て伏見宮のおん方より紅葉重の薄様よ斯なん
「思ひ云ふ孫言んとまれば搔くれく泪の外へ言の葉を
なし」と遊ばされつ此上の哀を誰らなると思へる
処よ帥宮より斯なん「数なく数なみの小山の夕時雨
強面松へ降甲斐もなし」とつ此御歌を見て女漫よ
心なとげなと覚えて手よ持なぐら詠ど伏うれば
早何ぞとと問程もなく帥宮の御使漫よ獨笑として






蝶来り鶯鳴て交々佳人の心情を悩ます

帰り参りぬ頓て其夜の深け過る程より牛車さえやうより軒らせてお迎ひに参りつゝ夜もちや丑満よりぬと急げば女下簾を褰きせてやをう扶け乗らせんとしる処へ父の基久外より帰り来り此体を見て箇夜中何方へ行ぞと問ふ母荅へて帥宮の召ふ應ト女を今参らせるありと聞も終らぬ基久い顔膨らして言へるやう事の外なる態を計らひ給ふもの哉伏見宮い春宮ふ立せ給ふべき由御沙汰なきに其御方へ参りてこそ深山隠れの老木までも花咲春ふも逢べきふ行末とても憑をなき帥宮ふ参り仕えん事い浅やかく親子の為ありぬ思ひ止まり給へうーと只管ふ止められを母も有理と思ひ返ー今夕女を参らせべきなれど只今俄ふ瘠への起りーそを打臥居れを後の夕べをそと程ふく断り御使の人と倶侶ふ迎ひの車と返ー帰帥宮へかくる事のなりぞそも露も思ーふを左のやと今日の憑を明日の憂と換えて度々御使なりるふ父母痛く拒えて参らせべくもなりを剰さえ伏見宮の御方へ参りぬと聞えーるべ貴賤上下の差

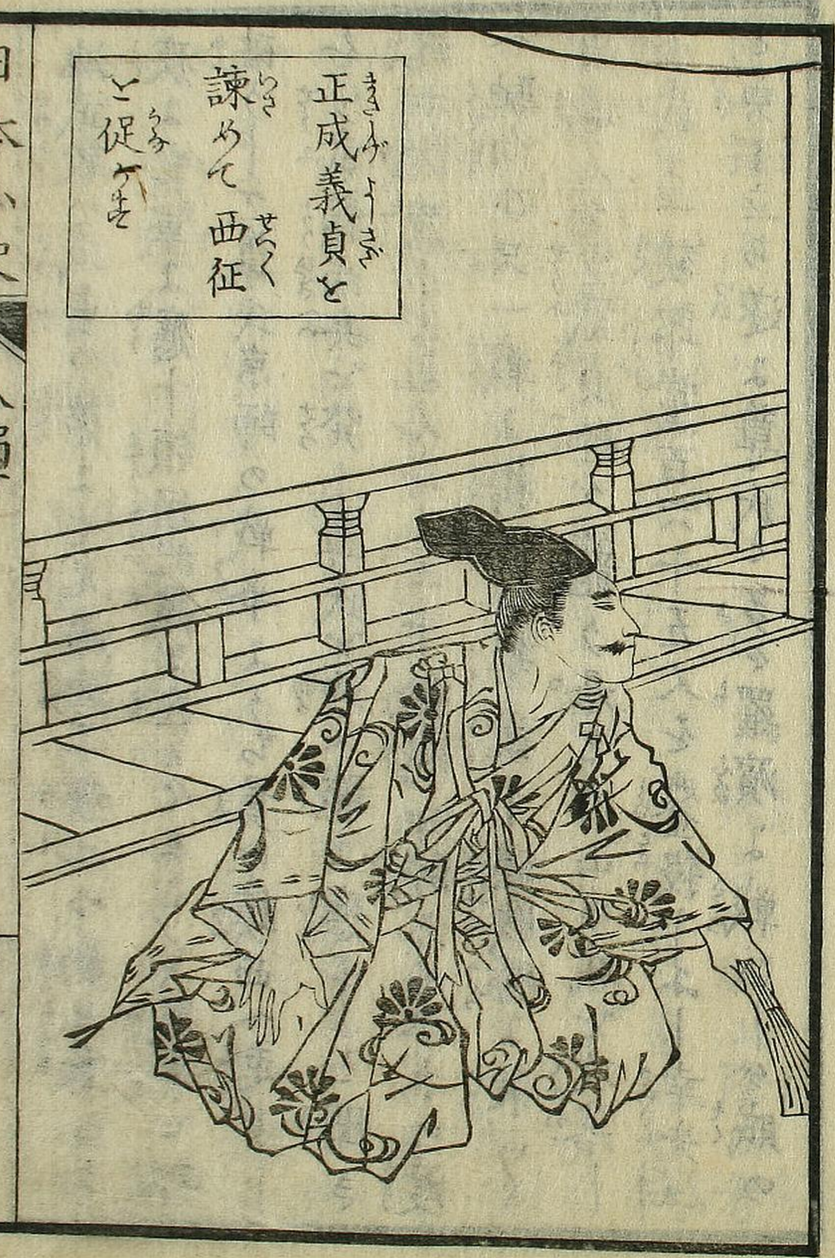
別なき戀ぞ積りて淵となりぬる愛憎忽ち地を換て東路の佐野の船橋左のみやゝ堪てゝ人の恋渡るべきと思ひ沈ませ給ふみを御憤りの末深くなげき給ひ基久指して咎なきなれど勅勘を蒙りて神職を解き貞久を補せらるる其後天下大ひに乱れて二君三帝天位を替きせ給ひしべ基久貞久僅に三四年の間に三帝改補せらるる夢幻の世のうつひ今に始めぬ事なれど我身の上に知られて世の哀をみや堪ぎりて基久はかく計り

「假寐の夢よりも尚仇なるはへ此頃見つる現なりけり」と一首の和歌を書遺して遂に出家遁世の身となりぬ」延元元年二月八日尊氏京師の戰ひ負け僅ふ敗兵を引て兵庫より海を航りて九州に落しまでは七千余騎の兵なりしかど追々に減じて筑前の國多々羅の濱に着し頃は五百騎ばかりなりぬ加之なほ矢種は射尽し鎧伏は尽く脱捨ぬ疲き勢力尽ぬ海鳥の泥に吻つる窮鳥の懐に入りぬ風情して知らぬ里に宿を問ひ狎れ人に身を寄れば

朝の食飢餓して夜の寐醒蒼々たり何是の日何是の時什麼なる敵の手に掛りて魂飛び骨空しく天涯望郷の鬼とあらんと明日の命も憑まれぬ若し其の時官軍追撃わを慧なく思ふ人もあらば義貞内裏より賜へ世尊氏忽ち亡びさらんに嚮に義貞内裏より賜へうし匂當の内侍が色香に沈溺し暫しが程も別れを惜みて春の桜花も散果る頃まで九州追撃の事を延引さしぞ是非なきれ正成義貞に説て曰らく夫兵を勝難くして敗を安く機へ得難く失ひ易し今我



破竹の勢ひに乗じ空しく急に尊氏を追撃まゐし賊兵復び聚まり死灰また燃ゆ則ち大事い去んと詞を尽して刺衝せしうどいまゞ西征を肯ぜず正成また諫めて曰く明公の忠勇よしと今一婦人に別れを惜みその色香に耽りて國家の大事を顧ざるい何ぞや触々賢慮なきまゝと言われて流石義貞も慚愧に堪ぎや深くその忠言を謝せりのうち脱換難き煩悩の迷ひの衣と鎧の別路尽ぬ名残の惜まれて荏苒月日を経過しつ猶その事を果さざりけり」菊


きみよりさ
正成義貞を
いさ
諫めて
さく
西征
うな
と促す

池武敏ハ武重の弟ニて兄弟共ニ無二の勤王家なり疾ク官軍ニ應ト領国肥後ニ在りて忽ちく賊軍を打破りしが尊氏京師の戦争ようち負け鎮西へ走りしを少貳頼尚兵を発し尊氏を迎へ賊ニ應ずると聞き疾や討散しつゝんぞと三千餘騎を帥ゐて水木の渡へ馳向ひ只一戦ニ頼尚を撃散し連戦勝ニ乗ゝて進んで少貳貞経が籠り居る内山の城を攻落し少貳が一族郎黨百六十五人を鏖殺しふ〜幸先宜と勇ミ立ち遂ニ尊氏と多々羅濱ニ戦ひしが賊の運や強うして官軍のうちより叛きて賊ニ降る者なりしが為め武敏遂ニ利を失ひ敗ぶれて菊池の城ニ帰る賊追撃甚だ急なり官軍必死ニ防ぐとゐえど衆寡敵せず力尽き憑みの城も乗取られ武敏僅ニ敗兵を收め山中ニ逃隠れ尚も再挙を謀らんと時機の至るを待ちく在り武敏が軍敗れてより九州中まゝ一人の官軍なく是ニ於て九國悉く尊氏ニ属し賊勢日ニ月ニ猖獗なりかくて中々の一大事ありとて京師の騒動大方ならず九國ハ鬼もな

也東國まで朝敵よりてへ叶へドとて北畠顯家卿を鎮守府將軍よ任ドさ奥羽へ下ー東北の鎮撫を掌どゝーゆ新田左中將義貞ゆ十六箇國の管領を許さ尊氏追討の宣旨をぞ賜ちる義貞綸命を蒙ア飽ぬ別を君の為め國家の大事ゆへ換られドと漸く斷ー煩惱の羈をそのまゝ手綱とゐー軍馬の粧飾花美よ已よ西國へうち立んと志給ひる折ら瘧の病よ侵されく心地死ねべく覚えーうべ先江田行義大館氏明を大將とー二千餘騎を授けく播磨國へぞ差下さる三月四日官軍京師を進発ーて同く六日坂本よ着よゝり賊將赤松則村ゆれと聞き備前播磨兩國の勢と合せく敵よ足と立させドと逆寄よ押寄ゝう江田大館二手よ分を室山ようち出則村と邀へ戦ふ賊軍利なくーて官軍勝よ乗ーうべ江田大館勢ひと得て兩國の退治輙ゝるぞ由頻よ羽書と飛ーて京師よ注進を去程よ義貞の病気も全快ぜーうぞ今い猶豫ゆきよなゝぞと五万餘騎を引卒ーて西と指てぞ進発ーたゆ現よ今回の戦争と

そ新田足利両雄が雌雄と争ふ龍虎の争ひ彼より関張の勇なれば我ら孫呉の智畧あり優ぞ劣らぬ戦争のその有様と綴らんみも丁数爰ら限りなれば本編へ爰ら筆を留め次編にいらく楠正成が湊川より戦死の戦況生てい忠臣死してい忠鬼その顛末の佳談珍説次の編と讀て知まろし

俗通日本小史八編巻之下 終


函館 魁文社
信州 諏訪 藤森平五郎
全 宮坂喜與次
全 吉左衛門
全 武居茂吉
全 丸屋庄兵衛
全 高美甚左衛門
全 松本 小松爲吉
全 大塚八十兵衛
全 竹内禎十郎
全 篭田重平
全 宮島市三
全 上田 柳澤德彌
全 小諸 小山佐傳次
全 九郎兵衛
全 矢島金八
全 高遠 十一屋半四郎
全 飯田 上の屋辨吉
全 常磐城 小桝屋喜太郎
全 長野 成田良三郎

大阪 前川源七
全 阿州 徳島 岡島眞七
全 飛彈 高山 坂井万吉
遠州 掛川 桝屋重兵衛
尾州 名古屋 三原屋甚藏
全 美濃屋代助
全 清七
甲府 梶田勘助
全 東浦榮次郎
全 小西屋庄左衛門
全 五明堂正八
全 藤森善七
駿州 静岡 今津美之助
全 杉本平七
全 喜多川屋茂右門
全 大和屋利兵衛
相州 御殿場 曾比屋平七
全 小田原 翁屋重兵衛
全 藤澤 川上九兵衛
全 釜屋清兵衛

| | | |
|---|---|---|
| 越後 | 新潟 | 林富吉 |
| 仝 | | 越中屋長八 |
| 仝 | | 仝與八 |
| 仝 | 三條 | 淺野六平 |
| 仝 | | 樋口屋小左衛門 |
| 仝 | | 淺間屋傳左衛門 |
| 仝 | 加茂 | 丸山音八 |
| 仝 | | 谷塲吉次郎 |
| 仝 | 氷原 | 西村六平 |
| 仝 | 沼垂町 | 山本屋久兵衛 |
| 仝 | | 中村政治 |
| 仝 | 高田 | 藤屋直三郎 |
| 仝 | | 寺島權四郎 |
| 仝 | 六日町 | 目黒宗内 |
| 仝 | 長岡 | 與板屋重吉 |
| 仝 | | 山口万吉 |
| 仝 | | 加藤利七 |
| 佐渡 | 相川 | 万屋長藏 |
| 仝 | 新穂 | 本間孫治 |
| 越中 | 高岡 | 國本吉右衛門 |

| | | |
|---|---|---|
| 仝 | 厚木町 | 高梨與左衛門 |
| 仝 | | 文明堂 |
| 仝 | 横濱 | 伊勢屋梅藏 |
| 仝 | | 池田孝吉 |
| 仝 | | 田澤多一郎 |
| 武州 | 熊谷 | 杉浦平左衛門 |
| 仝 | | 近江屋平吉 |
| 仝 | 鴻ノ巢 | 長島爲一郎 |
| 仝 | 浦和 | 中村朝次郎 |
| 仝 | | 本屋文藏 |
| 仝 | 八王子 | 小町屋德次郎 |
| 仝 | 秩父 | 大澤鶴四郎 |
| 仝 | 本庄 | 諸井巴 |
| 仝 | | 森田芳次郎 |
| 下總 | 佐原 | 提正平 |
| 仝 | 成田 | 淺井小三郎 |
| 仝 | 境町 | 高木直次郎 |
| 仝 | 野田 | 梅屋林藏 |
| 常州 | 太田 | 會津屋茂兵衛 |
| 仝 | 土浦 | 塚本權左衛門 |

| | | |
|---|---|---|
| 仝 | | 北野半七 |
| 加州 | 金澤 | 近八郎右衛門 |
| 仝 | | 知新堂 |
| 磐城 | 三春 | 碇屋傳吾 |
| 仝 | | 桔梗屋定藏 |
| 仝 | | 西村重兵衛 |
| 同 | 白石 | 關屋喜六 |
| 仝 | 柳倉 | 鍔屋平兵衛 |
| 岩代 | 福島 | 近江屋周助 |
| 仝 | | 光白屋清二郎 |
| 仝 | | 都田誠 |
| 仝 | | 島屋兼吉 |
| 仝 | | 上野屋彦太郎 |
| 仝 | | 鑑屋善兵衛 |
| 仝 | 針道村 | 渡邊彌助 |
| 仝 | 川俣 | 齊藤八四郎 |
| 仝 | 若松 | 田中善平 |
| 仝 | | 瀬の屋佐治善助 |
| 羽 | | 文字屋太右衛門 |
| 仝 | | 荒井清作 |
| 仝 | 前山形 | 八 |

| | | |
|---|---|---|
| 仝 | | 中湊江口平左衛門 |
| 野州 | 足利 | 新井金太郎 |
| 仝 | 宇都宮 | 西江屋勇藏 |
| 仝 | | 万年忠兵衛 |
| 仝 | | 田中庄太郎 |
| 上州 | 高崎 | 龜桝屋卯兵衛 |
| 仝 | | 文心堂 |
| 仝 | 前橋 | 藤屋勝藏 |
| 仝 | | 橋本屋文次郎 |
| 仝 | | 塚田屋佐太郎 |
| 仝 | | 山田屋金兵衛 |
| 仝 | | 松野屋貞吉 |
| 仝 | | 小林源次郎 |
| 仝 | 伊香保 | 千卷屋喜平次 |
| 仝 | 安中 | 岸巳之助 |
| 仝 | 桐生 | 三陸屋利兵衛 |
| 陸前 | 石の卷 | 山口敬之助 |
| 仝 | | 島屋正之助 |
| 仝 | 若柳 | 澤田正助 |
| 陸中 | 盛岡 | 井筒屋兼松 |
| 仝 | 黑澤 | |

全　高畑　佐竹久六
全　谷地　長谷川虎次郎
全　上の山　田宮五郎
全　米澤　相原多吉
全　大坂屋清兵衛　萬屋利七
全　辰己屋吉三郎　須佐權平
全　小出　素月最平
全　米澤　村上屋丹七
全　本間金之助
羽後　秋田　全和吉
全　戸島和助
全　戸島吉五郎
全　能味直治
全　大曲　佐々木長蘐
全　本郷　能登山五右衛門
全　松峯　叶屋次郎兵衛
全　酒田　白崎善助
全　五十嵐久助
全　鶴岡　京田屋孝次郎

全　登米　阿部清助
全　七ノ戸　加賀や清四郎
全　福田彌兵衛
全　八ノ戸　浦山太郎兵衛
陸奥　弘前　福永豊吉
全　山形多助
全　宮本甚兵衛
全　武田莊七
全　青森　柿崎忠兵衛
全　池田吉助
全　鰐口喜助
全　關清六
全　佐藤吉
全　渡島函館　祐村佐助
後志　小樽　佐々木常吉
全　上野藤太郎
全　山中豊平
全　福井音松
全　石狩札幌　大社源造
全　駒吉


版權免許

明治十四年四月三十日
同十年　月出版

編輯人　大阪府平民　渡邊義方
日本橋區濱町三丁目壹番地寄留

出版人　東京府平民　辻岡文助
同區横山町三丁目二番地


010190512989